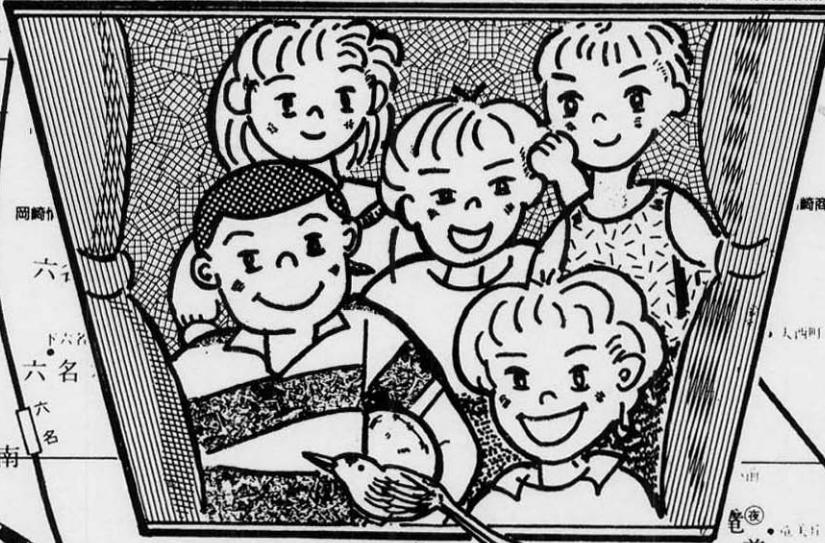


月報岡崎の教育

平成4年度 No.227~238



岡崎市教育委員会

文 光ヶ丘女子高校(私) 勤労文化センター
光ヶ丘 五本松運動場
織維センター



月報 岡崎の教育

4月号

伴走者になれるかなあ
この人生の冒險者たちの……

さくらの花びらが
ちらちらと飛んで来たから
ぱくつと食べちゃったよ
うん そう 春の味

烟の黒い土がねえ
ぼくんちまでついて來たよ
ぼくの運動ぐつに入つてね
新鮮なつぶやきと
生命の躍動する声とを
聞きたくて
私はここにいる
たくさんのがんと
いたずらっぽい眼差しとを
目撃したくて
私はここにいる

平成4年4月1日
発行 / 編集
岡崎市教育委員会



(読書まつり - 連尺小)

近年、科学技術の進歩と経済の発展によつて、人々の物質的生活が向上するとともに、情報化、国際化、都市化、高齢化など社会の各方面に大きな変化をもたらす

らしています。
その中にあって、自然破壊、公害、都
市化による人情喪失、利己主義化など枚
挙にいとまがないほど、自然や人間を大
切にする面から見た問題が多くあります。
見生の子どもたちの実態をみると、自

春には、餅草や土筆を摘み、蓮華草の菌に寝転んで土の香りを嗅いだものでした。夏には、蜻蛉や蝉捕り、川や池でよく泳ぎました。秋は、稻刈り後の田圃へ行って、竹筒を先につけた袋をもって、蝗をよく捕つたものです。これが当時で

- 自然とのふれあいの機会と場を
そこでは、現在の都市環境の中で、ど
ち、鍛えられ、成長したのです。

— 教育隨想 —

自然とのふれあい

元岡崎市小中学校長会長
山 本

体で知識を習得させ、創造的思考力を身につけさせることができるのでしょうか。幸い日本は、四面を海に囲まれた島国で、南北に長い国土の大半は、急峻な山に占められ、美しい溪流から悠々たる汽水の流れる河口等、四季の変化は鮮やかですばらしい自然がいっぱいあります。そこで、子どもたちをいろいろな所に連れていくて、自由に自然とのふれあいをさせたい。学校（自然教室・理科・社会・生活科の学習等）や家庭（旅行・長期観察等）でそれぞれに、子どもたちに自然に親しませる機会を多くつくつてい

そこで、子どもたちをいろいろな所に連れていくて、自由に自然とのふれあいをさせたい。学校（自然教室・理科・社会・生活科の学習等）や家庭（旅行・長期観察等）でそれぞれに、子どもたちに自然に親しませる機会を多くつくっていきたいと思うのです。ちょっとした努力

をさせたい。学校（自然教室・理科・社会・生活科の学習等）や家庭（旅行・長期観察等）でそれぞれに、子どもたちに自然に親しませる機会を多くつくっていただきたいと思うのです。ちょっと努力

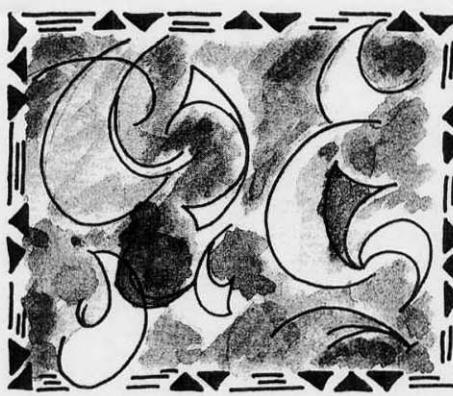
ただきたいと思うのです。ちよつと努力すれば、子どもたちが自然に学ぶ場はい
くらもあるのです。

然や人間の心情や行為の美しさや崇高さを感じとする心をなくしていると思われます。無関心、無気力など現在の子どもの象徴的な姿は、まさにこの表れであります。自然や人間を大切にする心は、人間が人間たる原点なのです。

私の子どものころは、官吏だった父の転勤で主に東北地方（宮城県）で育ちま

また、近くの野山を自由に駆け回り、木登りで落ちたり、川や池で溺れたりと、いう危険もいっぱいでした。服は年中泥だらけで、生傷は絶えたことがなく、母

き方や、身近な動植物といったわりあう結びつきなどを、ゆっくりと味わわせたい。なによりも、手や足や指先やからだ全体を使つて感じとらせたいのです。



近年、科学技術の進歩と経済の発展によって、人々の物質的生活が向上するとともに、情報化、国際化、都市化、高齢化など社会の各方面に大きな変化をもたらしています。

その中にあって、自然破壊、公害、都市化による人情喪失、利己主義化など枚挙にいとまがないほど、自然や人間を大

らしていません。田圃の風景が広がっていました。その中にあって、自然破壊、公害、都

市化による人情喪失、利己主義化など枚挙にいとまがないほど、自然や人間を大

田圃には、小川が注いでおり鮎や泥鰌が群れていました。

春には、餅草や土筆を摘み、蓮華草の菌に寝転んで土の香りを嗅いだものでした。夏には、蜻蛉や蟻捕り、川や池でよく泳ぎました。秋は、稻刈り後の田圃でよく泳ぎました。

喧嘩に強い子、いつも泣かされる弱い子もいましたが、しかし、親にいいつける子はなく自分で堪えたのです。そして、蜻

「綱領」
を支える力

特殊教育指導員

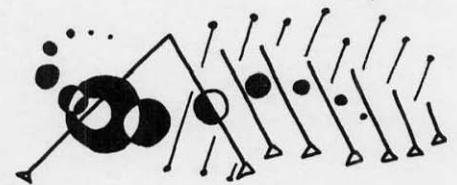
ハンドベルの音色が冴え渡る。先ほどまでざわめいていた会場も次第に静かになっていく。どこかですくなく虫の音と和し、しみとおるようだ。「コンドルが飛んでいく」の曲から「翼をください」へと曲が流れ。演奏している生徒も、聞いている生徒も、そして、教師も、いつしか、ひとつの大合唱の中にとけこんでいく。

これは、中学校合同宿泊訓練での交流会のひとつ。聞きほれていたK中学校生徒達の眼の輝きが変わっていく。心に



ふるさとシリーズ

この人に聞く

岡崎市国際交流委員会
アドバイザー

ジョセフ・ブルート 氏

この四月から全面実施される新指導要領の目玉の一つに国際化がある。この国際化に合わせて、市内の各学校に外国人やペルーアなどの外国人子弟の姿が見られるようになつた。

三月のある日曜日の朝、竜美丘の閑静な住宅地にお住まい、岡崎市の国際交流委員会アドバイザー(ODA)をされているアメリカ人のジョセフ・ブルート氏を訪ねた。

日本人の奥様(実家は、針崎町にあるぬし市仏壇店・小野則代さん)と一歳の息子さん共々大歓迎をしていただいた。氏は日本に住まれるようになつて八年

しか経っていないが、流暢な日本語を話される。「簡単な質問には直接答えられると思うが、もし難しい質問があれば、則代が通訳してくれるからどんなことでも聞いてください」

と言つて下さつた。

まず、どんなきっかけで岡崎に住まわれるようになったのかをお尋ねすると、「八年前までは、グアムの海軍基地にある小学校に勤めていました。ジュニアオリンピック水泳コーチをしていた友達と日本へ観光旅行にやつてきましたとき、メールでたまたま光ヶ丘高校の教頭先生と会つたのがきっかけで、光ヶ丘高校の英語教師として勤めるようになりました」

と話して下さつた。

なお、氏は光ヶ丘高校のほかに、附属中学校、東海産業短大の英語講師としてもお勤めになり、なおかつ二年前からは奥様と一緒に、英語塾を開き、太忙しい毎日を過ごしている。

英語スピーチエスティバル等の審査をたびたびしていらっしゃる。その様子について、「どの大会も参加者はびっくりするくらい上手で、発音も大変すばらしく完璧です。よくみんなに長い文を暗誦できるものだと感心しています。いつも代表を選ぶのが難しく困ります」

これから先の予定については、「岡崎は大好きな町なので、しばらくは

住みたい。今一歳の息子が大学を卒業するくらいまでは、岡崎にいたいと思っているが、まだよく分かりません」ということであつた。

最後に、日本の英語教育についての感想や意見を伺うと、

「日本では、文法は文法、会話は会話と別々に指導しているようで、文法と会話は一緒に教えることが必要です。会話をする中で、文法を教えるということは、文法が分かっているから会話ができると思うからです。」

と言われ、日本の高校入試対策のため、文法重視の指導には問題があるのでないかとおっしゃつた。

（氏名）ジョセフ・ブルート 生年月日 一九五三・一一・二二生



何か期するものがある様子。「A中学校の子たちはすごい。自分たちも負けておれないぞ。」続いて演奏されたA中学校のハンドベルの演奏も心がこもる。演奏することが決定して以来、毎日練習が続いた。一日休めば、元に戻すのに三日かかると言われる。夏休み返上で練習に生徒たちは耐えた。むしろ積極的であった。障害の有無を感じさせない意欲に支えられて、演奏当日を迎えることとなつた。

そして、東海・北陸地区特殊教育研究大会愛知大会の全体会（約1000人の参加）でA中学校、K中学校合同演奏という形で発表された。

曲目は「ふるさと」「コンドルが飛んでいく」「翼をください」の三曲。参会の教師たちを感動の渦の中に巻き込んでいた。わが子の晴れ姿を見つめる親の姿も見られた。

障害を持つている子どもたちにとって、生活力を高めるることは大きな課題である。根気よく教科指導を繰り返す。そして、体験学習で定着させ生活力を広げていく。こうして、子どもたちにやる気を起こさせ、感動できる機会をつくっていく指導こそ、特殊教育の大切な役割である。

さわやかな生徒達のこの体験が、生きる力、より成長していく力となつていくことを願つてゐる。

（精神遅滞の医学と教育）

学校教育の視点

一 平成4年度 一



日本は、経済的に豊かな社会となり情報化、国際化、価値観の多様化、核家族化、高齢化など、社会の変化が著しく進んでいる。子どもたちは、今後、この変化する社会に対応し、生きていかなければならぬ。

そのためには、私たち教師は、子どもたちが社会の厳しい変化に対応して現在お

よび将来を主体的に生きていける資質や能力を育成しなければならない。

一方、新学習指導要領の移行完了は、小学校は本年度、中学校は来年度となつた。そして、九月からは月一回の土曜日が休業日となり、いよいよ学校週五日制が始まろうとしている。

わたしたち教師一人ひとりがその内容を正しく理解し、知・徳・体の統一ある児童生徒の育成と生涯にわたる学習を支える基盤形成に最大限の努力をする必要がある。

(一) 学ぶ喜びを知り、自ら学ぶ態度や習慣を育てる

子どもたちは、だれもが、分かりたい、できるようになりたい、学ぶ喜びを知りたいという欲求を持っている。

子どもたちは、自らの力で問題が解決できただとき大きな喜びを感じ、自信を持ち、次の活動へと発展させるものである。

教師は、一人ひとりの子どもが自ら考え、自ら学ぼうとする自主的な学習態度の形成を願い、特に、次の二点に留意し

(二) 礼節を重んじ、こここ豊かな児童生徒を育てる

今の日本では、国民の大部分は高度成長と科学技術の進歩によって何不自由ない生活を送ることができる。しかし、物質面の豊かさにひきかえ、心の貧しさや道徳性の欠如は目に余るようになつた。

この現実を踏まえ、「礼節」と「ゆた

て指導したい。

第一点は、できるだけ生活の身近な中から問題を掘り起こし、自分の課題として解決への必要感を持たせる指導の工夫である。一人ひとりの子どもが問題を自らの課題として把握できれば、学ぶ喜びを知り、問題解決への追究意欲も喚起され、主体的に取り組むようになる。

したがって教師は、子どもの実態を的確に把握し、子どもに新鮮で感動を与える教材の選択、疑問を持つて取り組める提示方法などについて、きめ細かな指導の工夫がほしい。

第二点は、基礎的・基本的な知識・技能を定着させるとともに学習の仕方を身につけさせることである。学校教育において大切なことは生涯にわたって伸び続ける基礎的知識や学習の仕方を身につける工夫がほしい。

第三点は、一人ひとりの子どもの日々の姿を注意深く見守り、それぞれの子どもに応じた指導ができる能力や技術を高めたい。



社会変化の激しい今日にあって、学校教育に求められているものは、知・徳・体の統一ある児童生徒の育成と、生涯にわたる学習を支える基盤の形成である。

「教育は教師その人にある」

この言葉は、教育に携わる者にとって至言である。

岡崎の教師は、教育者としての使命を自覚し、全校一致の指導体制のもと、敬愛の情で結ばれた師弟関係をさらに強め、学校・家庭・地域が一体となつて、子どもたちの健やかな成長を願い、岡崎の教育の創造に一層の努力を傾けたい。

指導の重点

一、学ぶ喜びを知り、自ら学ぶ態度や習慣を育てる。

一、礼節を重んじ、こころ豊かな児童生徒を育てる。

一、自らを律し、たくましく生きぬく力を育てる。

(三) 自らを律し、たくましく生きぬく力を育てる

につけることができた。

一人ひとりの子どもが、目標を定め、自分の意思で努力して体験を積み重ねる中で、心の豊かさを育てていきたい。

昔は、兄弟姉妹も多かつたし、今の子どもよりも餓鬼大将を中心にして遊んだ。そして、多くの人と交わる中で、ぐく自然に命の大切さ、思いやりの心を身につけることができた。

かっては、子どもには家庭が地域社会

と一体になつて、人として守るべき規範を教えてきた。しかし、今日、その教育力は低下し、さまざまな問題が生じている。そのため、自分で自分を律し、た

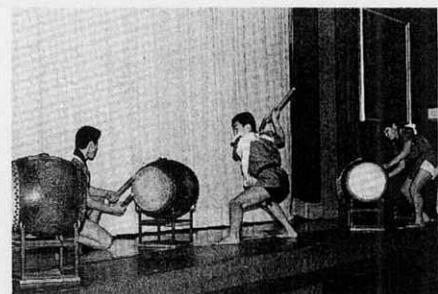
かなか心」を重点に、学校教育のすべてを通して、「心の教育・情の教育」に取り組んでいきたい。

その第一は、基本的な生活習慣や生活技能の徹底を図ることである。朝顔ができない、進んで挨拶ができない、身の回りの整理整頓ができない、夜更かしをする、余暇の活用ができない、ナイフが使えない、タオルがしぼれない、食べ物の好き嫌いが多いなど、集団生活に必要な基本的なことを繰り返し指導したい。指導方法としては、小学校でのできるかぎり早い段階に機会を逃がさず徹底して指導することが大切である。子どもは、体得の過程で、自己の規範が芽生え、自律の心が育っていく。

第二は、困難に耐えぬき、立ち向かう力をつけることである。たとえ失敗しても挫折することなく、最後まで挑戦する粘り強さ、たくましさを身につけさせたい。

今、登校拒否、いじめ、万引き、校内暴力などいくつかの問題行動が指摘されている。その原因として、家庭や地域社会における子どもたちの人間関係の希薄化があげられるが、一番大きな要因は困難に耐え、それをのり越えるたくましさの欠如にある。

教師は、使命感・責任感・情熱、そして子どもたちに対する愛情とたくましい行動力、実践力を持って、全校一致の指導体制のもと、子どもたちの健やかな成長を願い、岡崎の教育の創造に一層の努力をしたい。



若狭の日々

広幡小 山内 貴弘

九月に、福井県にある若狭少

年自然の家で自然教室を行った。六年生一三〇名、五泊六日の体験学習だ。その中で、ある素晴らしい人に出会った。自然の家の指導員、大森さんである。台風直撃の夜、大森さんは、子どもたちの前で、勇壮な太鼓演奏してくれた。荒れ狂う日本海をイメージした迫力ある演奏。窓の外は、文字通りの暴風雨。子どもたちにも、強烈な印象だった。あれから二か月。今年の学芸会は、学年全体で、その若狭の体験を劇や音楽で作品にしようということになった。プロローグ

かし、校内学芸会は失敗。もう格は、あの太鼓。私は、冬休みになると、早速、若狭に行き、大森さんに弟子入りした。たつた二日間の短い練習であつたが、なんとか形はマスターしたつもりで岡崎に帰ってきた。

冬休みが終わると、今度は子どもたちとの格闘である。太鼓は、明らかにパワーがすべて、大人がやつても大汗かいてやることを子どもがやる訳であるから、なかなかいい音がでない。たたきこみが毎日続いた。たたきこみをしていくと自然と呼吸が合つてくる。四人のぱちが、ピッタリ合つて海のうねりのよくな旋律をつくりだすのが目標。学芸会まであと一週間。

校内学芸会を明日にひかえ、子どもたちは、最悪の状態であった。1男の太鼓が、どうしても遅れる。ひとり狂えば、みんなが狂う。「やればやるほど、合わなくなってくるね。」もう一回やろう。これで最後。必死にねばる子どもたち。彼らは、知っている。だれのせいを。

しかし、1男を責めることは絶対にしなかった。そのかわり、よく声を出した。「がんばろう、あと少しじゃん」「ちよっと、俺が、もう少し遅くうつわ」しかし、校内学芸会は失敗。もう

グは、あの太鼓。私は、冬休みになると、早速、若狭に行き、大森さんに弟子入りした。たつた二日間の短い練習であつたが、なんとか形はマスターしたつもりで岡崎に帰ってきた。

冬休みが終わると、今度は子どもたちとの格闘である。太鼓は、明らかにパワーがすべて、大人がやつても大汗かいてやることを子どもがやる訳であるから、なかなかいい音がでない。たたきこみが毎日続いた。たたきこみをしていくと自然と呼吸が合つてくる。四人のぱちが、ピッタリ合つて海のうねりのよくな旋律をつくりだすのが目標。学芸会まであと一週間。

校内学芸会を明日にひかえ、子どもたちは、最悪の状態であった。1男の太鼓が、どうしても遅れる。ひとり狂えば、みんなが狂う。「やればやるほど、合わなくなってくるね。」もう一回やろう。これで最後。必死にねばる子どもたち。彼らは、知っている。だれのせいを。

しかし、1男を責めることは絶対にしなかった。そのかわり、よく声を出した。「がんばろう、あと少しじゃん」「ちよっと、俺が、もう少し遅くうつわ」しかし、校内学芸会は失敗。もう

後がない。1男は、涙ながらに練習した。ふとみると、ぱちの持つところが真っ黒だ。彼の努力の結晶、彼は、私のレベルのはるか上にいた。

本番が終わり、私は、舞台の袖にいる1男をみつけた。満足感いっぱいの顔。私の差し出し手に、彼は、両手で強くぎり返し答えてくれた。

H君が顔を見せてくれなくとも、何の反応もしなくとも、訪問を続けてくれていた。それを知つてから、クラス全員が動き始めた。

結局、H君は学校に顔を見せることなく施設に移つてしまつた。しかし、クラスとH君との交流は続けられ、機会あるごとにふれ合いの場をつくつていた。

最初、うすくまつて顔を見せようとしたH君。それでも子どもは、めげずに彼にぶつかっていく。まさに体当たりの働きかけにH君はどうとう笑顔を見せるようになった。そして、十二月の終わり、H君から手紙が届き、最後に、クラスのみんなによろしく、というメッセージがあつた。このとき、卒業式をH君と共にクラス全員で、と強く思つた。

H君にもその話をしたが、首できず、どうすることもできずじまいの状態であった。そんなH君に対し、私自身、半分あきらめた姿勢でいた。形だけの働きかけ、正直いつ、「何とかしてやろう」という気持ちちはあまりなかつた。

しかし、私の知らないところで、クラスのU君が、H君の家に足を運んでいてくれた。U君は、H君が顔を見せてくれなくとも、何の反応もしなくとも、訪問を続けてくれていた。それを見てから、クラス全員が動けないドラマが展開されていた。

朝、教室で、H君のスーザー・ホルンでの「螢の光」演奏、それを目を閉じて聞くクラスメイト、そして、そのままH君は、クラスの男子に手を引かれ、体育馆に。

私にとっても、そして三年二組全員にとっても忘れない卒業式となつた。

全員で卒業式

東海中 清水佐知子

教師六年目、初めての三年生担任、いろいろなことがあつた。大変だということは分かつていたものの、やはり予想以上に厳しい一年間だった。また、忘れられない一年間ともなつた。

最初、うすくまつて顔を見せようとしたH君。それでも子どもは、めげずに彼にぶつかっていく。まさに体当たりの働きかけにH君はどうとう笑顔を見せるようになった。そして、十二月の終わり、H君から手紙が届き、最後に、クラスのみんなによろしく、というメッセージがあつた。このとき、卒業式をH君と共にクラス全員で、と強く思つた。

担任、いろいろなことがあつた。大変だということは分かつていたものの、やはり予想以上に厳しい一年間だった。また、忘

れられない一年間ともなつた。

教师六年目、初めての三年生担任、いろいろなことがあつた。大変だということは分かつていたものの、やはり予想以上に厳しい一年間だった。また、忘

(6)

